山村蘇門・追考 ―― 略年譜、交友など

高橋明彦

山村蘇門に関しては、今田哲夫翁『山村蘇門』（一九八八年・郷土出版社）が唯一の優れた研究であり、私もその驥尾に付して蘇門の遺蔵板木の調査を中心に言及して来た（「山村蘇門の出板工房 ― 曽福島関所の遺蔵板木」『近世文藝』63号）。本稿はこの過程で作ったメモであり、不徹底不統一、その乱雑不備たるは免れ得ぬが、現時点で確認できた事柄を追認可能な形でここに記すことで大方の御教示を得、より詳細完全を求めたいと思う。今田氏の高著には遠く及ばないが、幾らかでもそれを補えれば幸いである。

一、山村代官家の人々

山村家は大江氏を祖とし、中世では木曽家臣団であるところの木曽衆と呼ばれる土豪のひとつに数えられた。関ヶ原合戦に功有り、近世では旗本（交替寄合）として番頭並・一万石の格式をもって遇せられ、在地の代官として木曽の支配を任せられる。旗本領として美濃国に五千七百石の知行地を持ち、他に白木五千駄も賜った。幕初天領だった木曽は元和元年以後尾張藩領となり、尾張藩木曽代官としては山林を除く村方支配のみに職権を縮少されたが、関所の管理者および幕臣としての待遇は続けられ、知行地もそのまま安堵されて、幕末まで木曽の支配を世襲した（山村良祺『木曽考続貂』弘化二年頃成・新編信濃叢書7。所三男「近世木曽林業の基盤」『金鯱叢書』8）。

さて、九世木曽代官の山村蘇門は、漢詩人として著名である。いま蘇門、およびその直接の影響の下に漢詩文に親しんだ子孫等について、生没年日や名称を中心に列記する。なお、これらは山村良祺になる『木曽考続貂』（新編信濃叢書・第七巻）の山村家系譜にほぼ詳しく、資料としても一級と見るべきものである。惜しむらくは、この書が弘化二・三年頃の成立ゆえ、それ以降に没した者の没年日などが記されない。ゆえ、山村家菩提寺の興禅寺の墓誌により補う。また、これらに見えない記事を載せるものとして、山村良祺『樵唱集』（大本一冊・山村代官屋敷所蔵）が参考になった。これは木曽人の漢詩集成で、割注で作者の略伝を、名・号、人為性行などを中心に記してある。以下、注記は後置せず、（ ）か＊によって示した。

山村蘇門

九世木曽代官。姓は大江氏。名良由（たかよし）、字は君裕、通称は甚兵衛、初め七之助、式部、三郎左衛門。伊勢守。号に蘇門、清音楼。従五位下朝散大夫。諡号は徳光院殿前勢州刺吏照山宗遵大居士。享年八十二歳。次節略年譜参照。

山村風兆

十世木曽代官。蘇門の兄（早世）良恭男。蘇門養嗣子。宝暦九年八月二十一日生。名は良喬（たかてる）、初め良明・良済。字は士遷、通称は甚兵衛、初め忠二郎、式部、三郎九郎。隠居名三左衛門。号に玉壘、白鶴楼。俳号に風兆。天明八年十二月四日家督、文化十三年二月二十八日隠居。嘉永三年十二月十日没。享年九十二歳。室は蘇門の長女なみ（貞光院殿心岩宗珠大姉）。

＊漢詩については、『樵唱集』に一首、友野霞舟『熙朝詩薈』巻九十二にも「山村良喬 二首」と載るが（伝に「山村良喬 字士木号玉壘木曽福島関大尹」と記す）、寧ろ俳人風兆として著名である。編になる俳書『水月集』（文化

七年十月跋・無刊記・白鶴楼輯・所見は天理図書館蔵本)、『山の錦』(文化十二年刊・橘屋治兵衛刊・所見は中央大学蔵本)など出版し、連中の所付より、美濃国まで含み木曽一帯の俳諧界への影響を見ることが出来る。蘇門主催の漢詩の会などに名を連ねぬ事がほとんどである点、些か興味を覚える。

山村良熙

十一世木曽代官。実は常州矢田郡領主細川玄蕃頭興晴の庶子四男。風兆良喬の養嗣子。安永三年十月十七日生。名は良熙(たかひろ)、字は士績、通称甚兵衛、初め恒次、三郎九郎。号に玉臺、蘭雪亭。文化十三年二月二十八日家督。文政十年三月二十五日没。諡号は仁寛院殿俊道宗賢大居士。享年五十四歳。養子となる以前に大田錦城に学んだ。室は蘇門女(良喬養女)しやう。しやうは寛政十年に卒し、後室に蘇門女(良喬養女)いを。いをは猗猗と号し、良熙歿後は貞俊院、後に蓬栖院と改める。

＊良熙を細川興晴五男とするものがあるが、根拠を知らない。亭号の蘭雪亭は、『樵唱集』に著作として「有蘭雪亭集如干巻」との記事からの推定。文政六年成『清音楼遺稿』が見返に「蘭雪亭蔵梓」とするが、当時当主の良熙の家蔵版である。

＊猗々は、幼少より蘇門に経書を学び、詩文、和歌、書画、琴、囲碁など能くした(『樵唱集』)。

山村良祺

十二世木曽代官。実は良喬の庶子。良熙の養嗣子。寛政十年十一月十三日生。名は良祺(たかのり)、初め良朞。字は久寿、稽顙。通称は甚兵衛、初め式部、靫負、三郎九郎。号に城陽亭、隠居して白翁。書斎を看雨山房という。文政十年五月二十五日家督。弘化元年に隠居、慶応二年没。諡号は少林院殿守道宗信大居士。享年六十九歳。室は良熙女その(蓮台院殿実現浄相大師)。そのは文政九年七月二十六日に卒し、後室に良熙女とし。

＊字稽顙は「曽祖考徳光君行述」(『清音楼遺稿』下)の末に見える。

山村良彰

良熙庶子。母は竹中氏。寛政十二年生。名は良彰、字は士徳。日光御門主家来本間相模守の養子となり、通称本間内記。

山村良緒

良熙三男。母は蓬栖院猗猗。享和二年生。良祺・良彰の弟。名は良緒、字は初め士嗣のち叔稽、号に介園、緑竹園。通称は善七郎、初め転、勇蔵。昌平黌に入り佐藤一斎門。二十五才で病に患り、早世したとも、四十八才まで病床にあったとも云う。

＊良彰・良緒の生没年は、興禅寺に墓も見出しえず不明。が、宮崎修多「古処山樵東行譜」(『江戸時代文学誌』6・一九八九年)に、原古処『古処山人集』(耶馬溪風物館蔵写本)より蘇門等の記事が示される。小生現本未見乍ら、文化十年原古処が木曽へ蘇門を訪ねた折の感懐をこめて蘇門以下九人の木曽詩人を各々七絶に詠んだもので、蘇門・良熙・猗々・秋元公英・大脇信就・武居敬斎とならび「公壽公子　良祺、称式部、玉臺男、十六／士徳公子　良彰、称恒次、玉臺男、十四／士嗣公子　良緒、称式五郎、十二」と記すという。良祺は文化十年で十六歳ゆえ、良彰・良緒の十四、十二も年齢であろうと推測した。＊良緒が一斎の門下であった事は、『清音楼遺稿』一斎跋などで分る。＊良緒は早世したと『樵唱集』では伝える。今田『山村蘇門』は二十五歳で没したとし、長野県国語国文学会編『信濃の古典』は、二十五歳で病を得、四十八代まで病床にあったとするが、根拠未詳、調査中。

山村良醇

十三世木曽代官。良祺男。母は蓮台院。文化十二年十二月二十四日生。名は良醇(たかあつ)。通称は七之助、式部、三郎九郎。号に鸞臺。弘化元年十二月家督。明治二年に関所廃止。明治十六年七月没。

＊『山村系譜』(鶴舞図書館蔵・名古屋市史編纂用の謄写本・市12－78)に「十五代山村良醇公事恒園」とあるが、恒園は字か号か不明。興禅寺の山村代々の墓は幅三尺高さ八尺もあろうかという大きな墓石を林立させるに、良醇墓のみ維新後ゆえ幅一尺弱高さ四尺程度の簡素な墓石に「山邨恒園之墓」とのみ彫られる。【図版1】は興禅寺山村家の墓石群。左から、五世良忠(たかただ)、

六世良景（たかかげ）、七世良及（たかちか）、八世良啓（たかひら）、九世良由。

二、蘇門関係略年譜

以下に略年譜を記す。序跋の後の括弧内は末の年記。但し、年の干支表記、月の異名表記は漢数字に改めた。★を附した著書は遺蔵板木の存することを示す。

寛保二年（1歳）
三月六日、木曽に生れる。父は八代目代官良啓、字は士迪、号は鮑山、嵐布。諡号は仁光院殿範鏡宗弘大居士（『樵唱集』、興禅寺墓誌）。母はなを、諡号は清岳院殿実源宗貞大姉（『木曽考続貂』）。

寛延二・三年（8～9歳）
この頃より読書に志し日夜書物を手にして倦む事を知らず、健康を害するを侍医が恐れ父良啓をして止めさせると、蘇門は悲しんで食事もとらなかった。良啓はあわててこれを許したという（良祺「曽祖考徳光君行述」『清音楼遺稿』所収、以下「行述」）。

宝暦十一年（20歳）
父に従って参府、将軍家治に拝謁する。この折に大内熊耳に入門する。（『木曽考続貂』、「行述」）

明和三年（25歳）
山村家儒員石作駒石、桑名の南宮大湫に師事する。この後、蘇門も大湫にも教えを受ける（「行述」）。
＊駒石の大湫入門は、細井平洲撰になる墓誌「石作子幹（ママ）碑銘」による。今田『山村蘇門』一一四頁に詳しい。

明和四年（26歳）
九月十二日、臣下の深田敬佐七十の賀を祝う（「敬佐翁七十寿詩文序」『清音楼遺稿』）。敬佐は号、名は安胤。代々の山村家臣。

明和八年（30歳）
山村家臣、上田静・高之文編『詩韻児解』（上下二巻）刊行。蘇門（明和八年秋）と駒石（明和八年秋）が序を与える。
＊上田静、字は伯義、聴琴と号す（『樵唱集』）。

安永四年（34歳）
『清音楼詩鈔』成る（同書序跋）。

安永七年（37歳）
秋、★『清音楼詩鈔』（大本・上下二冊）刊行。洗硯亭蔵版（見返）。序に内藤政陽（安永七年三月）・江村北海（安永四年九月）・南宮大湫（安永五年十一月）、校と跋（安永四年冬）に駒石、彫工に大脇文明（＝冲斎）、刊記は「安永七年戊戌秋／京都 西堀川佛光寺下町 唐本屋吉左衛門／江戸 日本橋通南一町目 須原屋茂兵衛／同 芝神明前 藤木久市／大坂 心斎橋通安堂寺町 大野木市兵衛／尾州 名護屋本町 風月孫助／勢州 津 山形屋傳右衛門」。
＊見返に見える洗硯亭は、書中に「七夕前一夕同田端伊藤洵三邨篤集洗硯亭」の七絶等あり蘇門の木曽の亭であろう。或いは蘇門家督以前ゆえ父良啓の築になるか。

安永九年（39歳）
八月、恩田維周編の詩集『莫逆編』に序を与える（刈谷市立図書館蔵・国文学研究資料館マイクロ）。恩田維周（尾張藩儒）・礒谷滄州（同）・石作駒石との三人集。蘇門序に続き、駒石の序（安永六年四月）がある。刊記無し。

天明元年（40歳）
十月十七日、家督を嗣ぎ、九代目代官職（『木曽考続貂』）。

天明二年（41歳）
継目御礼として子良喬を伴い参府し、将軍家治に拝謁（『木曽考続貂』）。

天明三年（42歳）
正月、江村北海『授業編』に序を奉る（『清音楼集』巻四）。

天明四年（43歳）
五月、臣下の澤田敬佐『木曽古事談』に序文を与える（鶴舞図書館蔵本・半紙本七冊、および『清音楼文集』）。

＊『清音楼文集』は、大本写本二冊、山村代官屋敷所蔵。蘇門の文章を集成したもの。書写者・書写年代は記されないが、蘇門生前或いは没後をそう下る物ではないと思われる。『清音楼集』『清音楼遺稿』等と内容はほぼ重複するが、文末の年記などこれにしか載せない記事があり、それらから直接抜出したものではなかろう。

天明五年　（44歳）

九月三日、木曽福島を出て王滝村を巡視する。良喬、上田静、高之文らが同行した。のち「王瀧紀行」を書く（『清音楼集』巻四）。

天明六年　（45歳）

六月、山村家侍医秋元士漢『古今方』に序を与える（「古今方序」『清音楼遺稿』下、『清音楼文集』）。

＊秋元士漢、名は公紀、士漢は字、錦江と号す（『樵唱集』）。

天明七年　（46歳）

この年、天明の飢饉。木曽最も甚だしく自ら村を廻り銭米を与え救済に努める（「行述」）。

四月、細井平洲が高弟樺島石梁を伴い江戸から尾張へ行く途中、木曽に立寄る。蘇門、歓待する。

＊今田『山村蘇門』一二六頁が、『石梁文集』蘇門序、『嚶鳴館遺稿』巻二・平洲七絶、石梁の詩（出典不明）、蘇門宛五月十五日付平洲書牘（木曽福島郷土館蔵）、などによりこの間の事情を考証する。「石梁先生年譜」（筑後史談会編『樺島石梁遺文』昭和二年刊）は、四月六日江戸発足、十六日尾張着とする。なお、平洲書牘への蘇門の返事が「報紀平洲」（『清音楼遺稿』下）で、天明の飢饉のこと、歓待感謝への謙辞などを記す。加えて、知人の手に渡りなかなか返してもらえずにいた「王滝紀行」を漸くこの手紙に同封出来たとも書かれているので、平洲がそれを読んだのを天明四、五年頃とする説は当らない。なお、平洲書牘は本年九五年より山村代官屋敷へ展示替えとなった。

天明八年　（47歳）

三月、将軍交替の挨拶に参府、家斉に拝謁。同じ頃、市ヶ谷尾張藩邸にて藩主徳川宗睦より去年の困民救済を労を賞せられる（「行述」）。

＊五月とするのは根拠未詳。

十月、尾張より出頭を命ぜられるが、病気により十一月に発足し尾張に至る。十二月四日、昨年の功により隠居を命ぜられ、食録三千石をもって尾張藩年寄役（家老）を任ぜられる。（「行述」）。

寛政元年　（48歳）

春、美濃国中津川の酒井盛真に呼ばれ、歓待を受ける（「応中津川酒井盛真需題適閑楼記後」『清音楼遺稿』下）。

寛政二年　（49歳）

六月、『説略』に序を与える（「説略序」『清音楼遺稿』下）。

＊文中に「松藩儒官木沢某纂書数巻名以説略其為書也」とある。松本藩儒木沢天童の著か。但し『國書總目録』には該書立項せず。

寛政三年　（50歳）

三月二十五日、江戸定府詰めとなる（林董一「尾張藩年寄考」『金鯱叢書』8）。居は市ヶ谷の尾張藩邸内（蘭室『宜雨堂詩集』の蘇門序）。

寛政四年　（51歳）

冬、石作駒石『翠山楼詩鈔』二編に序を与える。刊行は翌年。他の序者は江村北海（天明七年十一月）。刊記に「寛政五年癸丑春／京都　西堀川佛光寺下ル町　唐本屋吉左衛門／江戸　日本橋通南一町目　須原屋茂兵衛／同　通本銀座町三丁目　須原屋善五郎／尾州　名古屋本町一丁目　風月孫助／勢州　津京口　山形屋傳右衛門」。

寛政五年　（52歳）

十二月十六日、従五位下伊勢守に任ぜられる。叙爵は山村家で初めてのこと（「行述」）。

寛政六年　（53歳）

正月、伊東藍田編『文章軌範評林』正續編に跋文を与える。編者は大内熊

耳の同門。

寛政七年　(54歳)

三月、瀧川南谷『玉芝園詩草』に序文を与える(『清音楼文集』)。刊行は享和元年。

寛政十年　(57歳)

三月、病気につき尾張藩より致仕し、芝の賜亭清音亭に退隠する。老禄五十人扶持を給う。この後文芸に専念し木曽と江戸・尾張などを往還する。居は清音亭のほか隅田川縁にも別邸あり、木曽には清音楼のほか新たに仙鶴亭などを築く(「行述」)。

この年、★『観音経』を書写する(文政八年正月参照)。

享和元年　(60歳)

本田寛斎『寛斎叢書』に序を与える。

＊寛斎は号、名は子篤。『清音楼遺稿』上巻に哭詩有り。

享和三年　(62歳)

七月、★『清音楼詩鈔』二編刊行。清茂閣蔵版。序者に磯谷滄州(寛政十二年十一月)・樺島石梁(無年記)。校者に山村家臣の上田静・秋元公英・宮地正恭。跋者に山村家臣三村貢(享和二年十二月)。刊記は「享和癸亥春梓行／江都書林 盛章閣 富谷徳右衛門」。

＊蔵版元の清茂閣は未詳だが、山村家の閣号であって書肆のものではなかろう。『割印帳』は享和三年七月二十九日に許可。

文化二年　(64歳)

十一月、水無神社(木曽福島伊谷)に絵馬を奉納する。山村家御抱え絵師池井祐川画、寒山拾得図。「文化二年乙丑冬十一月伊勢守山邨良由 勤上」とある【図版2】。

文化四年　(66歳)

夏、吉川天山『天山詩稿』に序文を与える。＊吉川天山、名は俊豈、字は伯寿。高遠藩士。大内熊耳の同門(『清音楼集』巻四)。

文化五年　(67歳)

六月、木曽福島の六十一歳賀連中が水無神社に絵馬を奉納する。山村家御抱え絵師池井祐川画、願主二十人寿宴の図。題文が蘇門撰、秋元公英書。願主連名に「伊東源吾／下條長兵衛／千田傳右衛門／古坂惣兵衛／大脇文明／辻嶋助右衛門／細澤覚左衛門／原田作右衛門／上村義兵衛／沼田新蔵平井藤蔵／門前 古屋六兵衛／越中屋勘兵衛／上町 入屋仁兵衛／三津屋定次郎／松屋太四郎／冨屋彦十／下町 河内屋谷左衛門／八沢 嶋屋吉左衛門／大工源助／右 六十一歳賀連中」と記す。山村家臣の彫工大脇文明の生年がこれで分る。願主らは、武家のみならず「門前」以下九名は町人である。

文化七年　(69歳)

この年、渡辺方壷、木曽に来て蘇門に寄宿する。

冬、方壷、肥前・薩摩への歴遊を終え木曽に帰る。

文化八年　(70歳)

十月九日、蘇門を訪ねてきた尾張の賣茶翁歓待と称し渡辺方壷の発案にて、この日発足し王滝村を散策すること三日。随行者は他に大脇信就、今井道安、武居敬斎、秋元公英(途中で合流)等十余名。その間に得た詩数十首を録し池井祐川に絵を描かしめ一巻となした(「再遊氷湍紀行」『清音楼集』巻四)。

＊今井道安は、字士欽、号金床、山村家侍医。医を渡辺唱庵、経書を大田錦城、また尾張の小鹿淳安・京の高階安芸守に学ぶ。和歌を能くし正木千樹(ママ)に就き千春と号し松屋とも称した。笙の笛を好み時刻構わず吹き、瓢箪を携え名勝を探り酒が無くなって漸く帰る、一畸人也と伝える(『樵唱集』)。

文化九年　(71歳)

正月十四日、石作駒石没す(平洲撰墓誌)。

冬、丹羽桃渓編『本朝名家画譜』に序を与える。

文化十年　(72歳)

渡辺方壷と共編で★『忘形集』(半紙本一巻一冊)上梓。清音楼蔵版。序者

に石梁(文化十年四月)。跋(文化十一年五月)および校者に秋元公英。原古処の後詩を附し(文化十一年五月)、梯箕嶺も跋を書く(文化十二年二月)。彫工は臣下の大脇文明・求斎父子(拙稿「山村蘇門の出板工房」)。

＊箕嶺跋は増補によるもので、現存諸本でも箕嶺の跋を欠く版(国会鶚軒文庫・大阪市大森文庫)と有する版(慶応義塾図書館・刈谷図書館)がある。

八月、木曽義仲を顕彰した「木曽宣公旧里碑」を建てる。宮ノ越の旗挙八幡宮に現存。刻者は大脇文明・求斎父子。

文化十一年 (73歳)

九月九日、方壺などを伴い亡き石作駒石の旧居翠山楼で宴を催す(方壺七律「甲戌重陽陪蘇門公臺駕宴于其先太夫駒石先生翠山楼……」『樵唱集』所収)。

＊翠山楼は木曽福島八沢(やさわ)の西方寺内にあり、かなりの修改築を経た結果現在僅かに欄干や土壁などを遺すのみ。

文化十三年 (75歳)

三月三日五日両日、江戸芝赤羽橋の賜亭清音亭で曲水の宴を催す。参加者は次節参照。その後、★『暢情集』(正面摺り墨帖)が上梓される。後、石梁・菅茶山や木曽の家族・臣下らに読ませ詩を請い、附録としてそれらも増補上梓する。【図版3】は、『暢情集』附録・山村良熙の部分の正面版板木。

＊暢情集との名は、本来の正式名称なるかどうか、いま一つ不明ではある。図版に示した「読三日清音亭詩」、或いは精里序に「三日清音亭詩序」と、蘇門序は「三日清音亭會稿序」(『清音楼集』巻四に転載)、瀧川南谷より始る本文の巻首には「三日集清音亭分韻」とある。小異があって必ずしも内題と認定しえないが、およそ『三日集』『三日清音亭詩』あたりが正式書名かとも思われなくもない。先掲『信濃の古典』二一四頁も「三月集(ママ)」とするのは見識である。一方、『暢情集』とは古賀精里の題詞より採ったものでしかないが(後掲図版参照)、当該遺蔵板木の箱書に「暢情板在中三箱之内」等とあり、山村家で認知されていた題名と見てよい。その後、遺蔵板木により千村正士氏が打出した複製本(山村代官屋敷所蔵)に「暢情集」の題簽が附せられ、今田『山村蘇門』や木曽の郷土史関連書籍が一様にそれに倣っており、一般化された。敢えて異を唱える必要はあるまい。

冬、石梁『丙子東行日記』(嘉永六刊)に序文を与える。

文化十四年 (76歳)

十月、古賀精里の第二遺稿集『精里二集抄』に序を与える。

文政元年 (77歳)

正月、石梁『石梁遺文』に序を与える。他の序者は梯箕嶺(春)。

三月九日、十四日、隅田川の別邸にて雅集。参加者に樺島石梁・立原翠軒・高田西巷・大沼竹渓・瀧川南谷。その後、★『墨水集』(正面摺り墨帖)としてまとめ上梓する。序に立原翠軒(四月十五日)・石梁(三月)、跋に南谷(五月)。

文政二年 (78歳)

三月、★『清音楼集』(五巻五冊)刊行(見返)。清音楼蔵版。序者に石梁(文政元年三月)・南谷(文政元年二月)、跋者に曽孫山村良祺(文政元年十一月)、秦滄浪(文政元年十二月)。校者に良祺・良彰・良緒。彫工に大脇文明、芦澤兵次、山口七兵衛。入木による異板も在り、初摺は滄浪跋を持たない。数段階の増補が考えられる(拙稿「山村蘇門の出板工房」)。【図版4】はその板木。巻二、三十三丁ウラ(部分)。シャープな線を出した丁寧な深めの彫りであろう。右から五行目の「座」の字は入木である。

文政三年 (79歳)

四月、『清音楼遺策』を執筆する。内容は、木曽福島関所の有事にそなえた武備一覧および諸注意や心構えを記したもの。末尾に「文政三年庚辰夏四月／山村良由謹書」。

＊所見本の鶴舞図書館蔵本写本一冊は、名古屋市史編纂のための明治四十三年七月二十九日付け謄写本。原本は東京の山村家所蔵本を木曽福島永井清氏の保管により貸借したものと書写識語にある。『國書總目録』にもう一本登載する旧蓬左文庫蔵本は未見ながら、本書を板本あるいは漢詩文集とするのは誤り。

四～五月頃、方壷、米沢に神保蘭室を訪ね、木曽に帰る。
七月、蘭室との三十韻唱和集が一応完成し校正を始める。写しを石梁にも送るとすぐに次韻を賦して送り返して来た(「七月十二日蘭室宛蘇門書翰」・今田『山村蘇門』一六四頁に紹介される)。
この年、福島向城下夕町に学問所を設ける。創設に力を尽したものは渡辺方壷ほか家臣の大脇信就・秋元公英・武居敬斎・沢田伯猷ら。
＊沢田伯猷、伯猷は字、名は重徽、静庵と号す。初め経書を大田錦城、詩を菊池五山に学び、芝の賜亭の江戸留守居役となり、また松崎慊堂にも学ぶ。他に兵法より禅道あるいは瑣末な諸芸まで能くせざるなく、『藩南精舎詩』二巻ほか著述も多い、という(『樵唱集』)。

文政四年　(80歳)
正月、蘭室『宜雨堂詩集』に序を与える。刊行は翌五年三月。
＊序に言うには、米沢藩儒蘭室は既に故郷で隠遁し、私蘇門は一面識もない。が、石梁を介して蘭室を知り一束の韻を用い七律を贈れば蘭室から二冬の詩が返され、それより千里の距離を隔て書通にて三十韻の唱和を始めた、と有る。蘇門が最初に詩を送った時期は未詳だが、序には、寛政十年の致仕以後で江戸に半年以上住んだ年と云う。『清音楼集』に既に七虞まで転載される。
十一月以前、蘭室との三十韻が成る。蘭室が完成した由の序を書く(文政四年十一月上旬)。

文政五年　(81歳)
十月四日、江戸を発ち、同月十一日木曽に着く。十一月五日、病む(「行述」)。
冬、★『三十韻唱和集』(正面摺り墨帖)上梓。蘇門の跋あり(文政五年冬)。
なお、石梁の序(文政三年冬)有り。【図版5】は蘇門跋正面版板木。

文政六年　(82歳)
正月二日大発病。同月十六日木曽にて没す。二十八日、葬儀(『木曽考続貂』「行状」)
二月、子孫臣下等が『暢情集』『三十韻唱和集』の遺蔵板木を箱に収め保存を計る(遺蔵板木の箱書)。
三月、『墨水集』、『忘形集』が箱に収められる(遺蔵板木の箱書)。
この年、★『清音楼遺稿』(二巻二冊)刊行(見返に拠る)。蘭雪亭蔵版。編者は良祺・良彰・良緒、校者は武居敬斎(山村家儒員)。序者に石梁(文政六年五月)、佐藤一斎(文政八年二月)。跋無し。
＊一斎序に、文政七年中に良緒が稿を携え上梓の計画を語り序を乞うを記すので、実際の刊行上梓は文政八年以降か。

文政八年　(没2年)
正月、蘇門遺墨の★『観音経』上梓。【図版6】はその板木のうち、蘇門識語と良緒跋。
＊摺り出した現物は未見だが、遺蔵板木より概要が分る。縦長変形半紙本サイズの折帖で、蘇門筆の妙法蓮華経巻第八観世音菩薩普門品第二十五いわゆる観音経のあとに「寛政十年戊午之秋伊勢守山良由識」と書す蘇門識語が有り、その年に書写して木曽福島の長福寺に奉納した由を記す。次に、山村良緒撰・大脇信就書の跋文があり、本年蘇門三回忌にあたり写刻したもので原本は金泥をもって書写されている、と云う。板木の両端食の上下にある切込みは、擦り出しの時の見当であろう。

天保十四年　(没20年)
この年、良祺、山村家学問所を菁莪館と命銘する。＊明治に及び福島学校、現在では福島小学校。遺蔵板木は学問所に保管され、菁莪館・小学校を経て木曽福島郷土館・山村代官屋敷に移された(田中博氏御教示)。

弘化二～三年頃
この頃、良祺、『木曽考続貂』を執筆する。

安政元年　(没31年)
十一月、前年嘉永六年冬からこの頃までにかけて★中山後凋軒撰『先師澹斎長沼君行状集成定本』(大本一冊・柱題『澹斎君行状』)が彫られている。刊行は翌安政二年頃か。原自序(文化七年二月)、序に横井久時(文政三年八

月）・蘇門（文化七年夏）、自跋（文政二年九月）、ほか跋に中山子梅軒（嘉永六年九月）・山村良醇（嘉永七年安永元年十二月）。無刊記。

＊長沼流兵法の祖長沼澹斎を顕彰した書。蘇門は中山後凋軒を師として長沼流兵法を学んでいる。＊彫工は、芦沢兵次、大脇求斎（拙稿「山村蘇門の出板工房」）。遺蔵板木に「嘉永六丑冬」「嘉永七寅十一月」等の墨書が有り彫板時期が分る。見返に「木曽清音楼刻梓」とある。良醇が責任者であるこの書、なぜに蘇門の楼号を用いたかは不明。

文久三年（没40年）

夏、蘇門編・良祺増補『樵唱集』（一冊）刊行。序は良祺（文久三年夏）、跋に武居用拙（文久五年五月）。

＊見返に「看雨山房蔵版」とあるが、これは良祺の房号。現在遺構として残る山村代官屋敷は良祺の城陽亭で、その一室が看雨山房である。なお木曽福島郷土館の遺蔵板木のうちに、柱刻に看雨山房の銘を持つ半紙用罫紙（半葉十行）の板木一枚が有る。

三、『暢情集』の人々

文化十三年三月三日、蘇門は江戸赤羽橋の賜亭で王羲之・蘭亭の故事に倣って曲水の宴を催す。その折に恐らく懐紙が配られ、参加者に詩を求めたのであろう。そして、早い時期にそれらの自筆原稿を正面版で写刻し、烏金拓で打った正面摺り法帖『暢情集』を製したと思われる。その法帖は、樺島石梁、菅茶山、頼杏坪らにも贈られ、また木曽の家族や家臣もそれを目にし、感想を詩にする。そして、それがまた増補されるのである。法帖の現存は確認できないが、遺蔵板木によりその内実が分る。詳細は拙稿「山村蘇門の出版工房」に示したが、ここでは書残した参加人物等の考証を記しておく。今一つ判明しかねる人物も多いが、蘇門との関係を中心とし、著名人は簡略に記す。

古賀精里

寛延三年十月二十日生、文化十四年五月四日没。名樸、字淳風、通称は弥助。楼号復原楼。佐賀藩儒、寛政八年より昌平黌御儒者。朱子学派で、寛政の博士の一人。さて、『暢情集』は彼の題詞「暢情」の二字より採られた題名。【図版7】参照。序文「三日清音亭詩序」も与え、遺稿集『精里三集抄』巻五にも載る。主催する復原楼の詩会にも蘇門は出席している。例えば、精里没後だが文政元年三月十六日に、古賀穀堂、古賀侗庵、瀧川南谷、樺島石梁、安元節原、鈴木白藤、川北温山、牧原半陶、土屋壷關、村瀬誨輔、野田笛浦、那波希顔、等（『侗庵日録抄』）。『精里二集抄』（文化十四年十月）には蘇門が序を書く。＊没日について、三日説六日説が未だ行われているものを見掛けるが、侗庵自筆『泣血録』等に拠り誤りとすべき。

崖南嶠

明和六年生、天保五年没。紀伊藩儒。折衷学派。名は弘美、字は世煥、号は南嶠、淳蔵（順蔵）と称す。書斎を四時窓と言った。伯父で同藩儒崖熊野の養嗣子。絵画も能くし、『暢情集』でも清音亭の池の絵を描き、蘇門に「謝崖儒世煥製清音亭宴会図」の詩がある（広島市中央図書館蔵『与楽園叢書』巻四十九「四時窓詩文」。『清音楼集』巻一）。＊資料に笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』、『知己知嚢初編』（『森銑三著作集』十二巻）。

瀧川南谷

宝暦十年生。四千石の旗本。名は利雍、字は肅之、南谷と号す。安芸守。朝散大夫。北畠庶流村上源氏。天明五年に家督を嗣ぎ、寛政八年小普請支配、寛政十年甲府勤番支配。蘇門とは著書の序跋を与えあっている（二節参照）。蘇門の詩には「送南谷君之官甲州」（『清音楼詩集』二編坤巻）等、多い。＊資料に『寛政重修諸家譜』巻四六六、『森銑三著作集』七巻。

榊原草澤

紀伊藩儒。名は敬文、字は子礼。草澤・滄洲と号す。『暢情集』に「草澤 榊原名敬文字子禮 紀藩儒官」。石梁『石梁遺文』では蘇門の次に序を附し、巻一に七律「留別原子禮」あり。渡辺方壷が同じく菊池衡岳門下で

あったため昵懇で、上松の臨川寺内の「方壷山人留跡記」の碑文は方壷に請われてものしたもの。撰文中「蘇門君即命山人(方壷)輯応酬詩以為墨帖伝于世」と見える。この碑文および裏面の良祺撰文の方壷伝は、『木曽郡誌』および先掲『信濃の古典』(草澤撰文のみ)に翻刻される。

竹内吹臺

紀伊藩儒。『暢情集』に「吹臺 姓竹内名訥字士吉 紀藩儒官」。長沢孝三『漢文学者総覧』では通称與惣右衛門。

立原翠軒

延享元年六月七日生、文政六年三月十四日没。名は万。字は伯時、号は東里・翠軒。堂号を此君堂という。通称甚五郎。水戸藩儒。大内熊耳門下、また細井平洲にも学んだ。＊咸章堂巌田健文という彫工を抱え、正面摺りで中国の古法帖を多く刊行した(岡沢慶三郎『咸章堂巌田健文』)。蘇門の墨帖製作もこうした影響下にあるのだろう。今後の課題である。

大沼竹渓

宝暦十二年生、文政十年十二月二十四日没。名は典・守諸、字は伯経、通称は次右衛門。竹渓と号す。漢詩人、幕臣。『暢情集』には「竹谿 姓大沼名典字伯敬 江戸人」とある。男に枕山。

土屋壷關

安永七年生、文政二年没。名は朗、字は子潤、通称は七郎。屋郎・壷關と号す。会津藩儒。昌平黌精里門。『知己知嚢初編』に「壷関 朗 子潤 会津侯藩 土屋七郎」。会津耶摩郡壷下村に生れ、藩主松平容敬に仕え学料五人扶持にて昌平黌入門(拙稿「昌平黌の怪談仲間」江戸文学12)。『暢情集』に「壷關 姓土屋名朗字子潤會津侯臣」。『清音楼集』巻一に四古「応土屋子潤需題室鳩巣国字札」有り。

石冢雪堂

明和三年十月二十七日生、文化十四年二月七日没。名は胤国・崔高、字は志堅、通称は次郎左衛門。雪堂・確斎と号す。薩摩国加世田の人で、郷士の家に生れ藩校に学び、藩校の句読師。文化四年藩命により昌平黌精里門、書生寮の舎長。同十二年藩校の助教に抜擢、帰国しようとしたが病にかかり、江戸で没した(侗庵「石塚君墓碣銘」『事実文編』巻五十五)。『暢情集』に「雪堂 姓石冢名崔高字志堅薩州儒官」。『清音楼集』巻二に七律「哭石塚志堅」有り。【図版8】は『暢情集』の揮毫写刻。落款は石冢崔高・志堅。

山縣太華

天明元年生、慶応二年没。名は禎、字は文祥、通称半七、太華と号す。萩藩儒。山縣周南の五世孫。初め亀井南冥に学ぶが後江戸に出て朱子学へ転向する。九代明倫館学頭。『暢情集』に「太華 山縣名禎字文祥長州文学」。『清音楼集』巻二に七律「迎山縣文祥兼送西帰」、『清音楼遺稿』に七律「寄山縣文祥」等あり。『精里二集抄』巻一に「送山縣生序」が有り、精里にも学ぶか。

梯箕嶺

明和五年生、文政二年正月十四日病没。名は隆恭、字は季禮、通称傳。箕嶺と号す。久留米藩儒。父は対馬の出身で久留米藩医官牛島立庵の養子となり、その次男が箕嶺。十三四歳の頃より一歳年長の樺島石梁とともに梅林天山和尚の下で学び、二十歳で儒員。亀井南冥に学び、また江戸・京にも遊学した。江戸藩邸滞在中は藩主の伴読を兼任した(『石梁文集』後編「梯季礼墓表」)。『暢情集』には「箕嶺 姓梯名隆恭名季禮筑後州文学」とあり、『清音楼集』巻三に七律「春日訪梯箕嶺次其韻」、『清音楼遺稿』に哭詩あり。『忘形集』にも跋す。＊参考に『国書人名辞典』一巻。

古賀穀堂

安永六年十二月五日生、天保七年九月十六日没。佐賀藩儒。精里長男。文化十四年から世子鍋嶋直正の侍講として江戸に住む(侗庵「伯兄穀堂先生墓碣銘」『事実文編』巻五十九)。『暢情集』に「穀堂 姓古賀名燾字溥卿肥前侯臣」。『清音楼集』巻二に「和古賀溥卿見寄韻」の七律ほか、関連する詩は多い。

松木魯堂

天明五年生、天保九年十月二十四日没。名は肅、字は文雍。号に魯堂、

通称彦右衛門。神保蘭室門下米沢藩儒。『暢情集』に「魯堂 姓松木名肅字文雍羽州藩臣」。蘭室『宜雨堂集』翠軒跋に「出羽人松木文雍」と見え『知己知嚢初編』にも載る。『清音楼遺稿』に「送松文雍帰羽州」あり。なお、『穀堂遺稿抄』巻二に「送松本魯堂序」とあり、侗庵「魯堂松元君墓碣名」『事実文編』巻六十三では字春雍、称彦左衛門とするなど、松本姓の可能性もある。

三輪韋斎

名は重胤、字は景仲、号は韋斎、十郎左衛門と称す。羽州上ノ山藩儒。『暢情集』に「韋斎 姓三輪名重胤字景仲上山侯臣」。倉成龍渚『龍渚遺稿』(広島市中央図書館『与楽叢書』所収)巻六に「送三輪氏暫赴上山城 三輪氏豊前人仕上山侯」と題する五律があり、文化八年・頼春風『東風詩草』(同右『与楽園叢書』所収)に「三輪韋斎宇詩画会」の七律などあり、豊前の人で画も能くしたらしいが、未詳。『清音楼遺稿』に「哭三輪韋斎」があるので、蘇門生前に没した。

服部小山

天明七年生、天保三年没。尼崎藩儒。『暢情集』には「小山 姓服部名元雅字量卿江戸人」。南郭の曽孫(南郭―白賁―仲山―小山)。仲山も尼崎藩儒。文化十二年江戸藩邸に藩校止善舎が創立され、教授として江戸に在住した。

＊『近世藩校に於ける学統学派の研究』。

渡辺方壷

宝暦十一年生、天保四年七月三日没。名は礼・礼司、字は伯高、方壷と号す。佐々木氏。江戸の人。放浪詩人であった。『暢情集』に「方壷 姓渡邊名禮司字伯高江戸人客遊在木曽」。父は明石藩士だったが罪を得、方壷は十三歳で仏門に入り身延山にのぼるが意に満たず二十歳で還俗。儒者となり西国に下り亀井南冥・薮孤山、また江戸では紀伊藩儒菊池衡岳に学ぶ。諸国を放浪し、木曽の蘇門の所に初めて寄宿したのは文化七年中と今田氏はする。良祺『樵唱集』の方壷略傳に「宗遵君(蘇門)ト唱酬スルコト二紀、……邑学(学問所)ヲ興建ス」と有り、以来、蘇門の没する文政六年まで二紀二十四年の付合いであった。但し『春水詩稿』(『与楽叢書』所収)の文化七年正月に既に「廿七日渡邊伯高至賦贈〈礼司、木曽福島山村氏幕賓、今将遊九州。云歴菅塾諸處来〉」との五律があるので、蘇門への寄宿はもうすこし遡るかも知れない。春水はこの時江戸に在り、『春水日記』同日にも方壷来訪の記事が有る。文化七年中は一旦西に下り、冬に木曽に帰る(五律「庚午冬西遊肥薩而帰也」『忘形集』)。山村家での役割は大きく、この曲水の宴でも参加者の詩の取りまとめ役で、『暢情集』に「使剞劂打而帖之因使予書年紀其尾」と記す。文政三年山村家学問所の創設にも中心的役割を果す。江戸では明石藩邸にも住んだが、晩年は江戸四谷戒行寺に身を寄せた。戒行寺に葬る。享年七十三歳。『樵唱集』に、著書に蘇門共編『忘形集』のほか、岡本花亭編の遺稿集『方壷集』初編二編が有るが未刊と云う。なお、生年享年は『慊堂日暦』文政十一年十二月二十一日の記事による。榊原草澤撰「方壷山人留跡記」(文政十年六月成)の碑が木曽上松の臨川寺に在る。今田哲夫『山村蘇門』に戒行寺の過去帳の写真が在り、晩年の記事を示す。『樵唱集』には、穀堂が方壷に贈った詩が紹介され、方壷の自ら「詩ニ耽テ妄語多ク酒ヲ嗜テ生涯ヲ誤ル」と云うと言う。

土岐正恭

山村家臣。通称新吾。天明三年御坊主、寛政六年御徒士、江戸添留守居役、文政二年宮地宇右衛門の養嗣子。文政五年家督、江戸御留守居役、文政六年十月二十五日病死。蘇門の詩文中には宮地正恭として頻出し、『清音楼詩鈔』二編の校者の一人。『寛政年中山村良喬家中分限帳』(『長野県史・近世編』6)に江戸芝留守居添役に「土岐新吾」。

国見以禮

山村家臣。『暢情集』に「国見以禮 字士譲」、号を巽山(『樵唱集』)。『山村家中係譜』で国見家六代目源兵衛であろう。享和二年御側、文政八年奥御用達、天保十二年御目付、嘉永四年御関所番、同六年九月十四日病死。

＊『山村家中係譜』(ママ)は写本・半紙本七冊。山村家臣をいろは順で家別に事跡を記したもの。最終記事は関所廃止の明治二年。山村代官屋敷蔵。

宮地両

山村家臣。名は両、字は伯維。『暢情集』に「宮地両 字伯維」。『山村家中係譜』の六代目宮地源兵衛(別称四郎太夫)か。明和三年家督を嗣ぎ明和四年御側出番、安永五年関所番、寛政元年贄川御番、安永九年中津川代官、文化五年御物頭、文政元年隠居、文政五年八月十二日病死。或いは、七代目宮地彦助(後に源兵衛)か。文化十年関所番、文政元年家督を嗣ぎ、天保十二年隠居、弘化五年正月九日病死。何れか未詳。

田鹿方英

山村家臣。『暢情集』に「田鹿方英 字伯曄」。『山村家中係譜』に田鹿家(田近とも)、六代目吉右衛門(永斎、文内、文右衛門、文左衛門とも)は安永七年御坊主、天明二年御徒士、寛政十一年家督を嗣ぎ、文化十三年御側召出、文政八年七月二十一日没。七代目田鹿鹿太は享和四年奥坊主、文化十三年御徒士、文政六年濃州へ軍学修業、文政六年家督を嗣ぎ御側へ取立、天保六年三月五日病死、等あるが、何れか未詳。

吉田春辰

山村家臣。『暢情集』では「脩契余興」の題字を書き、落款に「春辰之印」「孟甲氏」。『山村家中係譜』の吉田春庵(亀太郎、元盛とも)か。医師の家系で二代目。寛政九年家督、天保八年隠居、嘉永五年二月七日没。

ここまでが、曲水の宴の参加者であり、他に山村良彰がいる。次に列記するは、増補部分に載る人々である。以下の他に、山村良熙、猗々、良祺、良緒、菅茶山、樺島石梁がいる。

大脇信就

山村家臣。名は信就、字は士賢、号は翠竹亭、惣助と称す。大脇氏嫡流七代目。『暢情集』に「大脇信就 字士賢良熙臣掌財用兼参家政」。勘定奉行・家老等を勤める山村家の上級武士だったが、天保九年に冤罪を被り改易。男武市郎(名は肅のちに騏、字希魯、号自笑)の努力で弘化三年に復帰する。信就は蘇門の詩にも頻出する。

秋元公英

山村家臣。代々侍医を勤める。名は公英、字は玉芝。通称一庵・文成。『暢情集』に「秋元公英 字玉芝良熙侍医」。寛政七年御医師、寛政十二年家督、文化三年に京都へ医術修業一ヶ年、弘化三年隠居、弘化四年八月十八日病死(『山村家中係譜』)。『清音楼詩鈔』二編の校者。『忘形集』の校・跋者。

和田利衡

山村家臣。暢情集に「和田利衡 字千里良由侍臣」。『山村家中係譜』では和田只右衛門(仙弥、理兵衛とも)であろう。文化九年奥御坊主、文化十四年家督、文政七年良醇公守役、弘化二年奥御用達、文久二年隠居(或いは没か)。

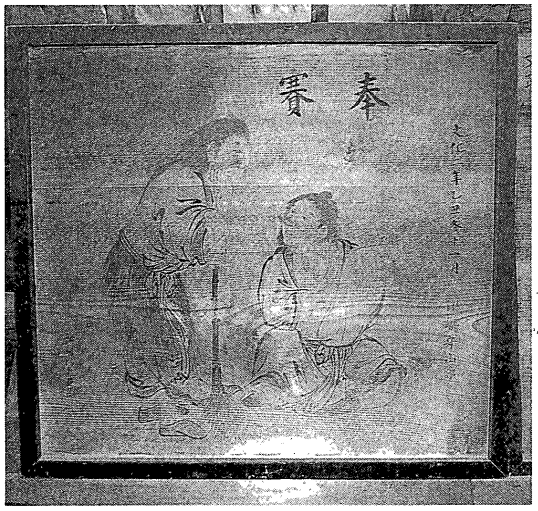
武居矩文

山村家儒員。名矩文、字直夫、号敬斎、通称禎輔など。『暢情集』に「武居矩文 字直夫良由侍医」。『山村家中係譜』に「四代目武居禎輔 慶助礼輔」。父は卑賤の出で武居氏の養子。天明五年生。幼少より学問を好み、享和二年小使い、文化三年下男、文化十年草履取り、文化十三年御坊主、文政三年学問所設立に功有り助教、文政八年家督を嗣ぎ御徒士に取り立てられる。天保二年学問所学頭。嘉永四年に隠居。安政二年九月四日病死(『山村家中係譜』)。学問所(菁莪館)学頭は嗣子用拙が継ぐ。

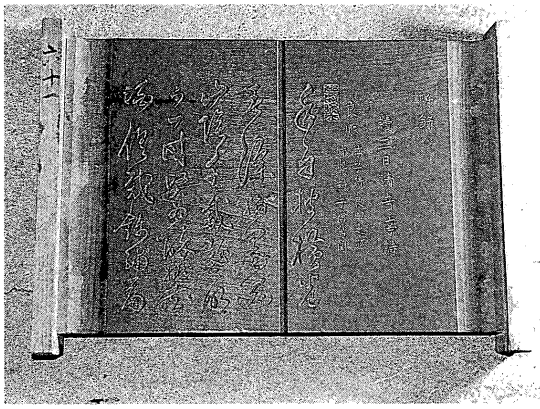
【附記】本稿は、平成七年度科学研究費補助金(総合研究A・代表は鈴木俊幸)「近世後期における書物・草紙等の出版・流通・享受についての研究―木曽妻籠林家、及び、木曽上松臨川寺所蔵板木の調査を中心に」の成果の一部である。本研究にあたっては、木曽福島教育委員会の田中博氏の格別の御配慮と御教示に与りました。記して感謝申し上げる次第です。

(平成7年10月20日受理)

【図版 1】

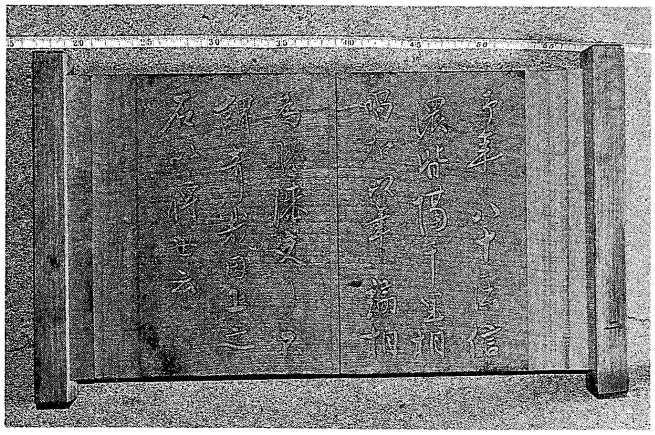


【図版 2】

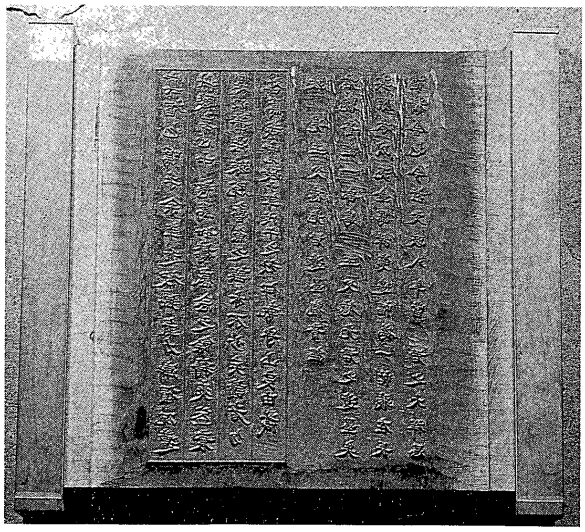


【図版 3】

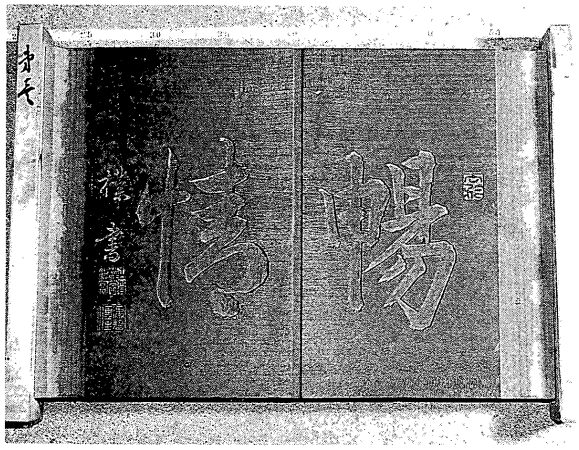
【図版 4】



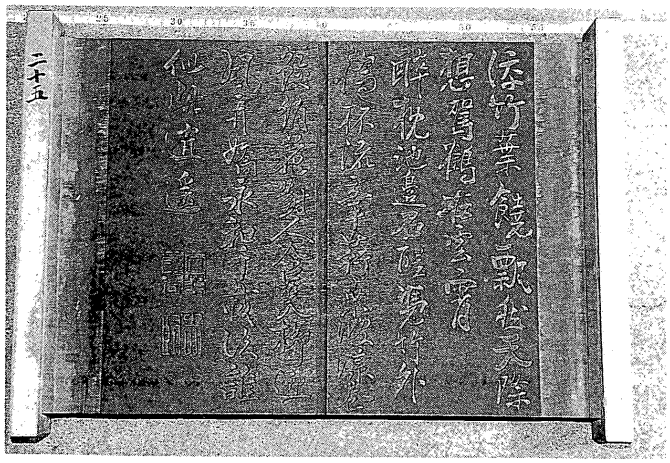
【図版 5】



【図版 6】



【図版 7】



【図版 8】